
ラウンジ

久世はるや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラウンジ

【Nコード】

N3413P

【作者名】

久世はるや

【あらすじ】

「6月、梅雨、携帯電話」をテーマに。
年上の彼女、男の子視点。

「ケータイばっかいじってないで本でも読んだら？ 少年」

先輩が読んでいた文庫本から急に顔を上げると、そう言って面白そうに笑った。

学部内のラウンジ。定位置に彼女を見つけた僕は、コーヒーを買ってからその正面に座り、携帯電話を開いた。僕に気付いているのかそうでないのか先輩は本から目を離さない。僕は邪魔するのも悪い気がして声をかけられず、結局無意味にウェブを開いたりメールを読み返したりしていた、んだけれど。

いきなりそんなことを言われるなんて思っているわけもなく、僕は先輩の顔をまじまじと見つめ返してしまった。

「……何よ。あたしの顔そんなに変？」

「い、いえ、すみません」

「ま、いいけど。それで、君は本とか読まないの？」

「いや、人並みには読みますけど……先輩こそ、貴女が読書なんかしてるところ、初めて見ましたよ」

「梅雨だからよ」

先輩は、断言した。

「もう6月でしょ。雨も続いている。つまり梅雨よ。だからあたしは本を読むの」

「梅雨、だから、本を読む？」

「そ」

面白そうに、楽しそうに。彼女は言って、笑う。

化粧つ気は薄いのに長いまつげが揺れるようなまばたきをして。
シャツの七分丈の袖を肘上までまくり上げて。
カバーのかかった文庫本を右手に持って。

彼女は笑った。

「だから君も本を読みなさい。そうじゃなきゃそのステキなケータイねじ切るわよ」

「ねじ切る、って……」

「こう、画面のほうとボタンのほう持って、ぐいって」

雑巾でも絞るような仕種を先輩がするものだから、僕は反射的に携帯電話を鞆の中に突っ込んでしまった。

先輩はいよいよ可笑しくてたまらなくなったらしく、けらけらと声を上げて笑う。文庫本はついに机上に伏せられた。

僕は気恥ずかしさを紛らそうと、その妙に薄っぺらい本を指さして、先輩にきいた。

「先輩は、何を読んでいらっしゃるんですか」

「んー？ なかはらちゅーや」

「……………」

「知ってるでしょ、汚れっちまった悲しみに……って。ぴったりじゃない」

何がぴったりなんだか、さっぱり分からない。

あれは梅雨の詩じゃないし、先輩はちっとも孤独じゃない。

は、僕がいるから、なんて言ったら、先輩は、僕の大好きな彼女は、また笑うだろうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3413p/>

ラウンジ

2010年12月10日22時35分発行